「読み合わせ」のこと

廣川　智貴

『研究報告』といってまず思い出すのは、自分が執筆した原稿の事でもなく、『研究報告』の規約を改訂するのにしばしばおこなわれた集まりでもありません。また、『研究報告』の発送作業であるとか、そのあとの打上げのことでもありません。『研究報告』という響きで私がただちに想起するのは、今はなき旧独文研究室、そして現在の独文研究室でおこなわれた「読み合わせ」の光景です。「合評会」という呼びかたが一般的だと思うのですが、『研究報告』には「読み合わせ」という語呂がなぜかしっくりときます。

「読み合わせ」といっても規模としてはそれほど大きなものでなく、執筆者の2〜3人、それに博士課程の院生を加えたおよそ10名にも満たないごくごく小さなものでした。この小さな集まりは、10名以上が執筆するようになった今の『研究報告』からはちょっと想像できないかもしれません。現在ではどうなっているのかわかりませんが、当時は「読み合わせ」の参加者は、すべての原稿に目をとおしておくというのが大前提でした。そして、この約束事はある程度に守られていたように思います。複数の、しかもまったく異なる作家やテーマを扱った論文を短期間のうちに読まなければならないのにもかかわらず、参加者はかなり丁寧に読んでいたのではないでしょうか。このような下準備を経、午後1時過ぎからやおら「読み合わせ」がはじまり、これがおよそ数時間続くのです。

私も何度か『研究報告』に紙面を借り、論文を掲載させていただきました。そして、そのたびに原稿は「読み合わせ」の俎上に載せられることになります。「読み合わせ」では、論文全体の構成といった全体的なことから、句読点の位置といった細部に至るまで、先輩後輩を問わずまさに忌憚のない意見をいただくことができました。これがきわめて有益だったのは言うまでもありません。そして、これこそが「読み合わせ」のもつほんらいの意義でしょう。しかし、このような論文そのものに関するいわば実用的な面とは別に、「読み合わせ」は、私にとり一種の精神安定剤のような役割をも果たしていました。これはいっけん矛盾しているかのように思えるかもしれません。忌憚のない意見を交換し、議論することが「読み合わせ」のほんらいの意義だ、などとむしろ精神を不安定にしてしまいそうなことを述べたばかりなのですから。「読み合わせ」が精神安定剤たる所以は、きわめて個人的な事柄に関わっていました。

私事で恐縮ですが、当時、私は言語学と文学とのあいだを取りもつのが自分の仕事だ、などと

生意気にも思い、それに関する論文を書いていました。このような言語学とも文学ともつかない、どっちつかずの論文に対してコメントを頂戴することは、指導教官以外にはほとんどありませんでした。しかし、教官以外にほとんど唯一意見を求めることができたのが、そう「読み合わせ」でした。自分の論文に対する意見が批判的なものであろうと、肯定的なものであろうと、そのこと自体はじつはそれほど大きな問題ではなかったのです。ただ、自分の論文をそれほどまでに詳細に読んでくれる人たちがすくなくとも「読み合わせ」という空間には存在する、そう思うだけで慰めになりました。もっとも、文学関係の論文とはおよそ思えないような図表のおおく並んだ訳のわからない原稿を強制的に読まされた当時の正会員のみなさまには、迷惑千万であったに相違ないのですが。

しかし考えてみると、このような「読み合わせ」の精神安定剤的効用は、おそらく私だけのものではなかったのではないか、とも思われてくるのです。以前になにかの書物か記事で、紀要論文の平均的読者数は数名にすぎない、と書かれているのを目にした記憶があります。まして大学院生の執筆する論文を読もうとする人はそれ以下でしょう。そう考えると、「読み合わせ」の効用は、論文の質を向上させるのはもちろんですが、それだけではなく、執筆者に自分の論文には読者がいるのだというごく当たり前の事実を認識させ、それゆえに執筆の動機をいっそう高めてくれることにもあるように思われるのです。批判されるにせよ、評価されるにせよ、自分の論文に目をとおしてくれている人が目の前にすくなくとも「紀要論文の平均的読者数」と同数、場合によってはそれ以上の人がいる、「読み合わせ」とは私にとりそのような贅沢な空間でありました。

最後になりましたが、たいへんなご苦労の末に『研究報告』を創刊され、それを継続してこられた諸先輩方、そしてこれからこの雑誌をさらに展開していこうと腐心されている現正会員のみなさまに心からの敬意と感謝を表しつつ擱筆いたします。

〔大谷大学任期制助手〕